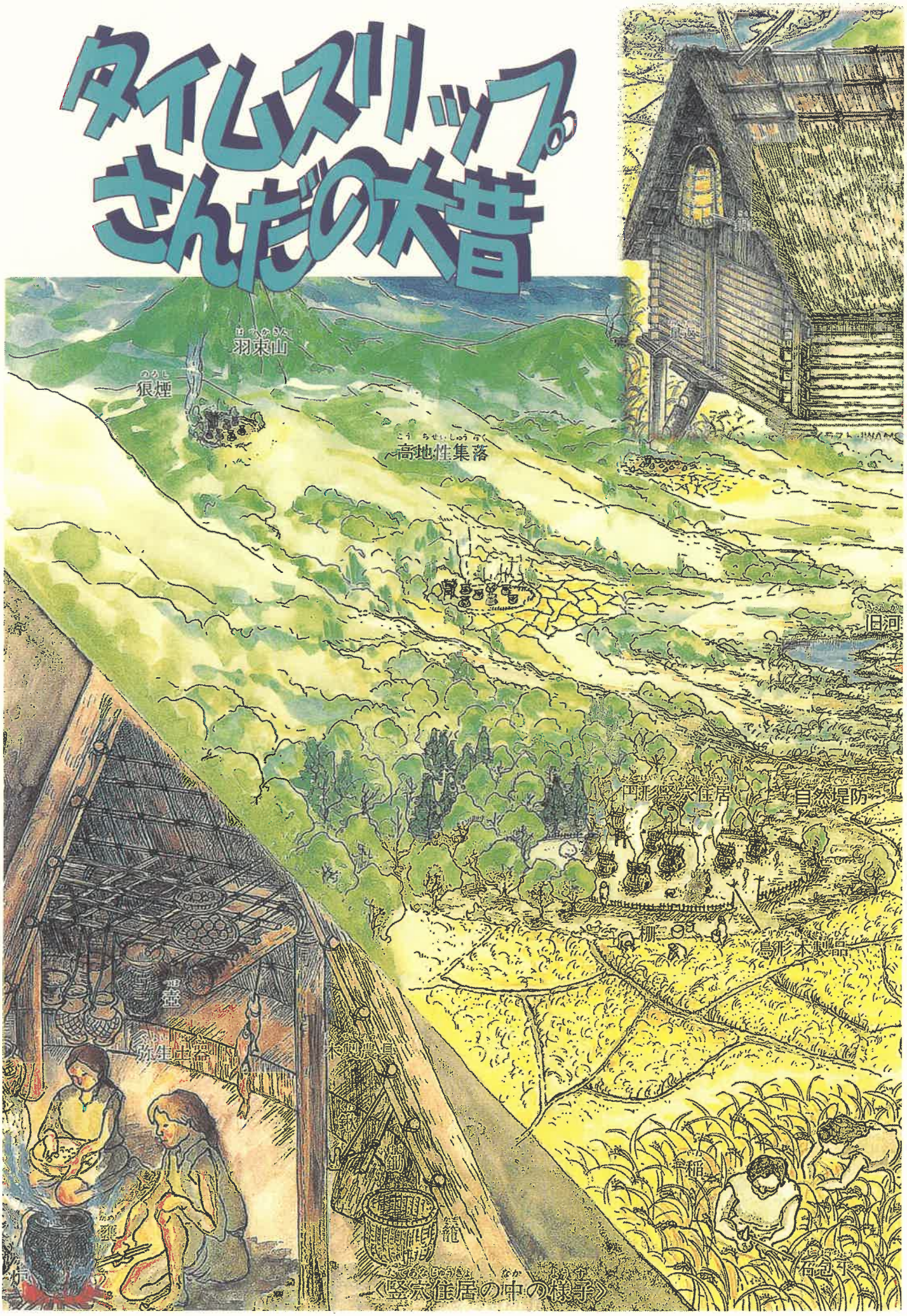
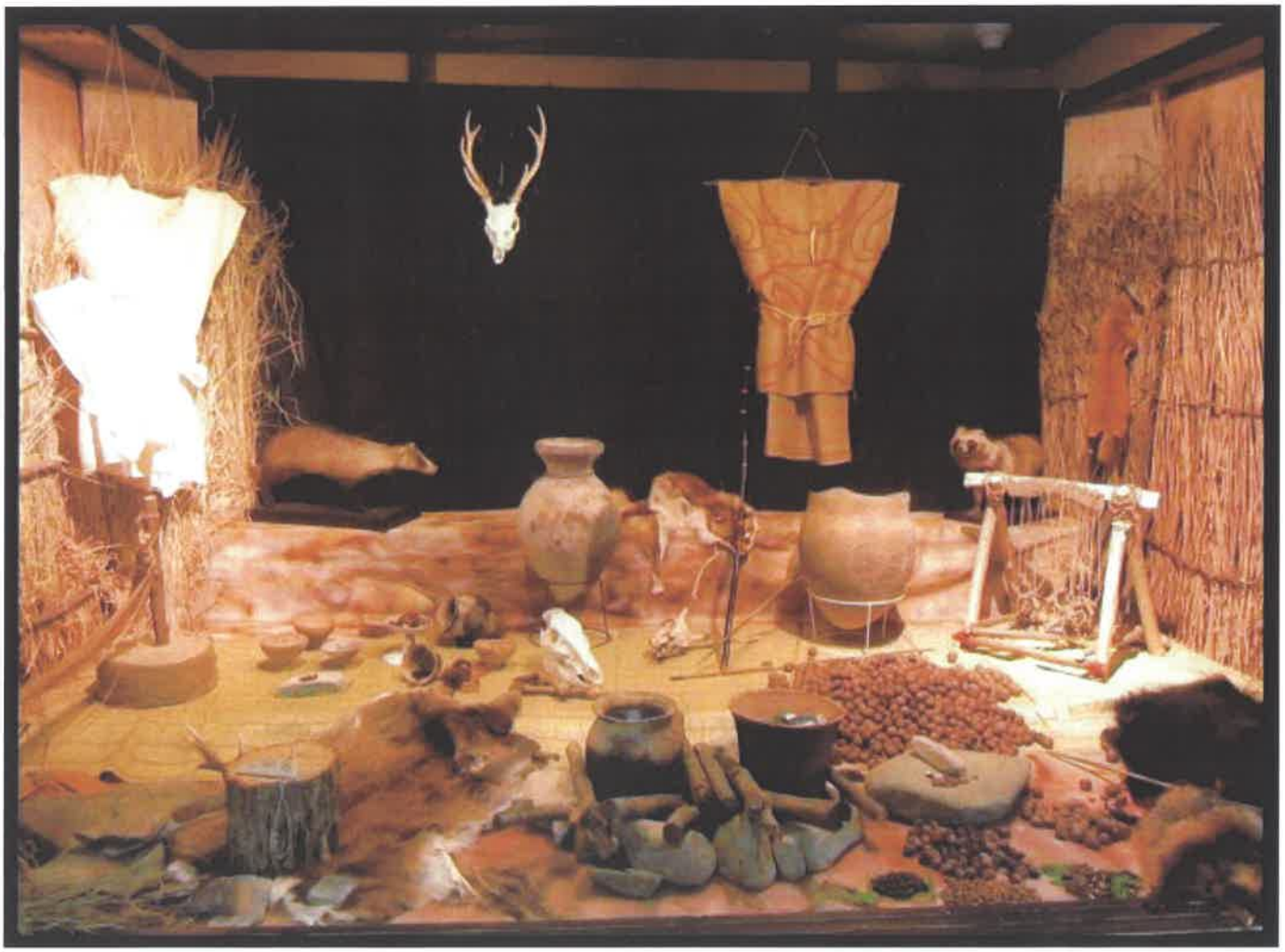
タイムスリップ さんだの大昔



〈竪穴住居の中の様子〉



「タイムスリップ三田の大昔」より
縄文・弥生時代の生活のようす

☞旧石器時代（～約１万年前）

氷河期であった旧石器時代は、海面が低くなり日本列島が大陸とつながり、動物や人類が陸づたいに日本にやってきました。

☞縄文時代（約１万年前～紀元前３世紀ごろ）

縄文時代は約１万年間続きました。縄文時代には土器の製作が始まり、ムラが作り始められました。

三田のできごと

- 三田で最も古い、人が住んでいた跡（溝口遺跡）
- 三田で、最も古い土器（小柿東村遺跡）
- 高平に大きな村ができる（大藪遺跡）
- 市内の各所に村ができる（下井沢遺跡など）

旧石器時代 → 縄文時代

石斧

名称は「石斧」ですが、最近では細いほうに長い柄をつけて土を掘る道具であると考えられるようになりました。野山の根菜類を掘るなどに使われました。

溝口遺跡

ナイフ形石器

溝口遺跡

剥片（原石から割り取った石のかけら）の一部を細かく割って作った、鋭い歯と、とがった先端を持つナイフのような形をした石器。ヤリのように棒の先に取り付け、狩りの道具として使われました。

縄文土器

☜小柿・東村遺跡

布木・堂ノ前遺跡☞

表面を平らにするための縄（撚り糸）をころがしてつけた、文様を持つものが多いので「縄文」土器と呼ばれます。縄以外に、貝で文様をつけたものも三田から出土しています。

土器が作られるようになったことで、食べ物を煮炊きできるようになり、ドングリのような生では食べられなかったものが食べられるようになりました。また、煮炊きだけではなく食べ物を貯蔵するためなどにも使われました。

下の写真は深鉢という形の土器で、縄文土器の約７割がこの形をしています。

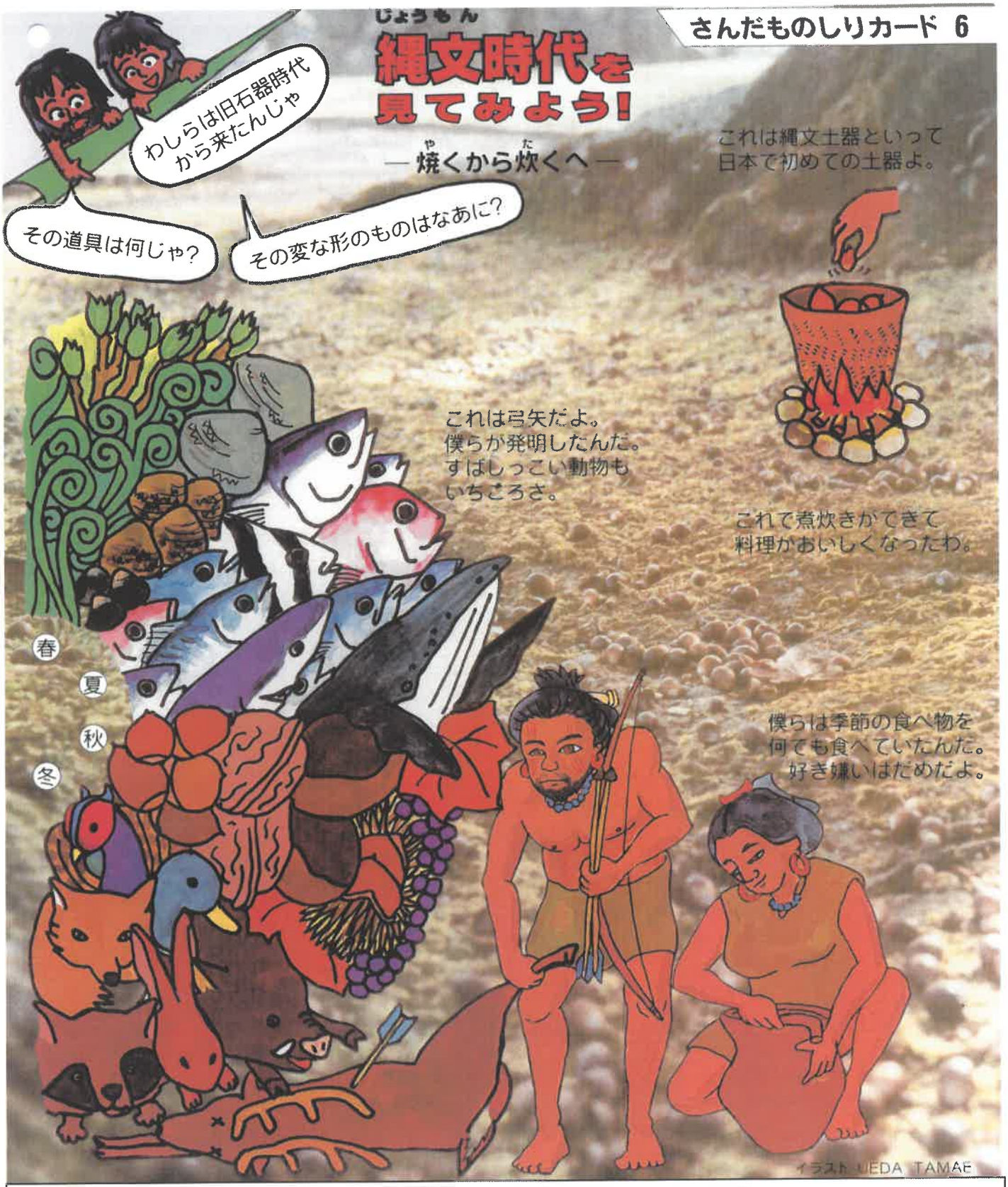
有舌尖頭器

木器荘園内遺跡

有舌尖頭器はヤリ先として作られました。この時代はまだ弓矢が使われておらず、他の動物を狩りするのに重要なものでした。

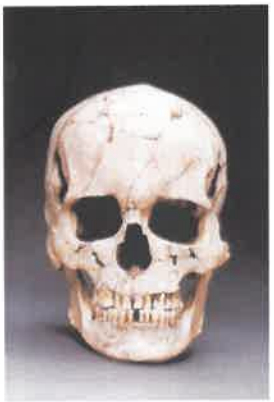
縄文時代を見てみよう！

―焼くから炊くへ―



縄文人ってどんなヒト？

縄文人の顔は、ほりが深く、まゆ毛は太く濃く、目は二重まぶた、鼻も大きく、クチビルは厚かった。顔が大きく、横長の四角いがっしりした作りだった。縄文人は成人式や結婚式、あるいは葬式の時に、わざと歯を抜く習慣もあったという。



出典：IPA「教育用画像素材集サイト」http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/

☞弥生時代（紀元前３世紀頃～紀元後４世紀頃）

木製農具・石包丁を用いた本格的な水田稲作がはじまりました。青銅器や鉄器が普及し、石器が少なくなりました。また、貧富・階級の差が発生しました。

- 石包丁を作る村ができる（三輪餅田遺跡）
- 堀で囲まれた大きな村ができる（天神遺跡）
- 丘や山の上に続々と村ができる（奈カリ与遺跡）
- 再び平地に村がもどる（川除遺跡）

縄文時代 → 弥生時代 → 古墳時代

弥生土器

弥生土器は、覆い焼きと呼ばれる上から泥などをかぶせて焼く方法で焼かれています。この方法により、弥生土器は縄文土器よりも固く、薄く、均質に焼き上げることが可能になりました。また、弥生土器は壺、カメ、鉢などたくさんの形が作られるようになったことも特徴の１つです。

上井沢・小屋垣内遺跡

絵画土器(弥生土器)

川除遺跡

この土器にはシカが描かれています。このように、弥生時代の土器にはシカがたくさん描かれています。シカの出産時期と稲刈りの時期が重なるため、大昔の人々はシカを特別な存在として考えていたのでしょう。

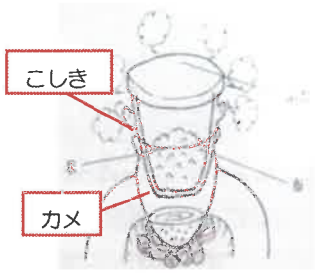
手あぶり形土器(弥生土器)

三輪・宮ノ越遺跡

火を入れて手をあぶるような形だから、手あぶり型土器という名前になりました。あまり出土しないことから、単なる暖房や照明の道具ではなく、火を使った特殊なまつりなどに使われたと考えられています。

こしき(弥生土器)

上井沢・小屋垣内遺跡



＜使い方＞

カメの中に水を入れると、沸騰した蒸気がこしきの底の穴からあがってきて、米を蒸します。

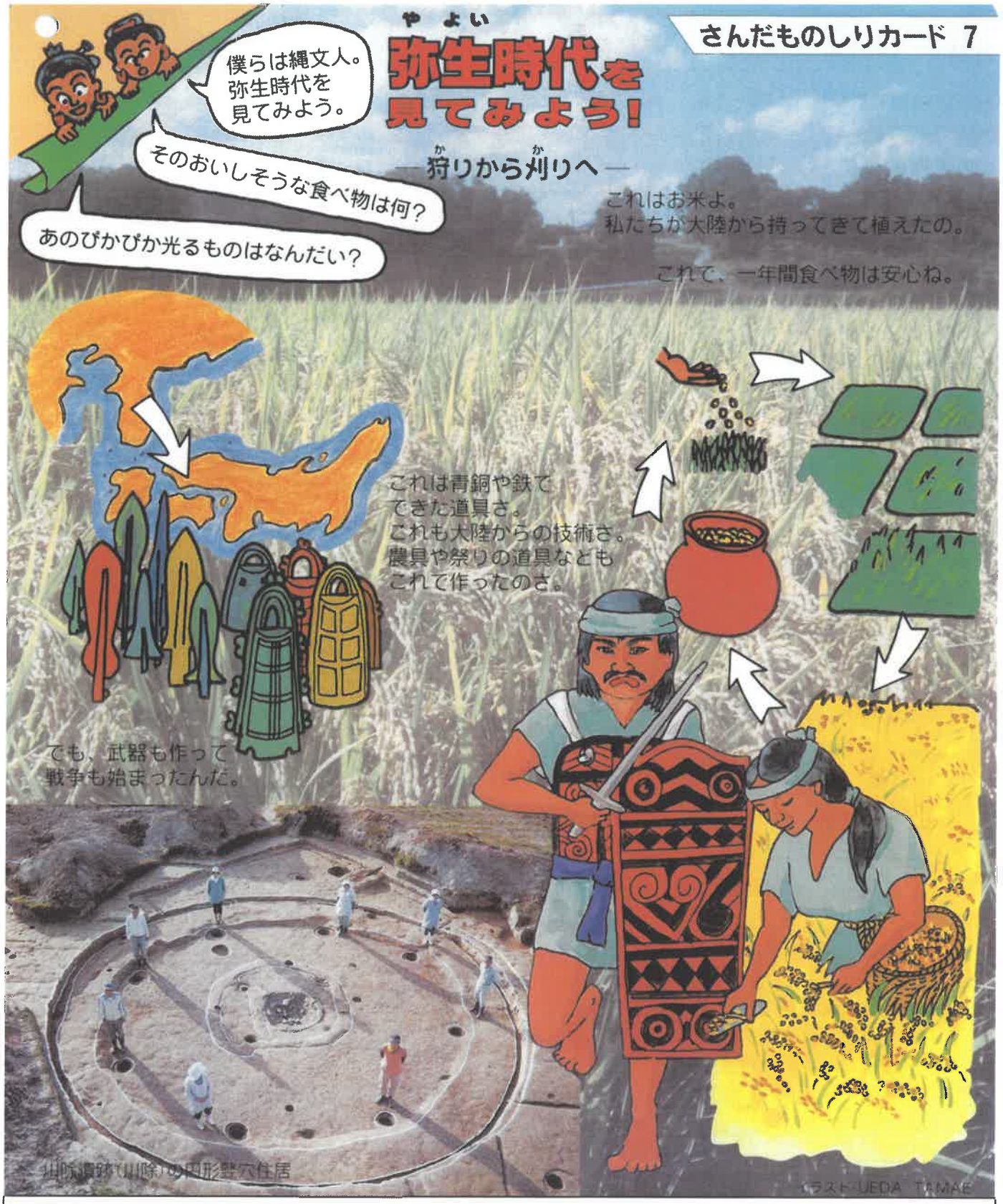
天神遺跡

石包丁は長さ10ｃｍほどで、稲など穀類の穂をつみ取るのに使われました。ひもを通す穴があいています。三田から出土した石包丁の多くは、有馬川の付近から取れる塩田石で作られたものです。

石包丁

弥生時代を見てみよう！

—狩りから刈りへ—



弥生人ってどんなヒト？

弥生人の顔は縄文人と違い、顔は上下に長く、のっぺりとしている。鼻は低く、まぶたは厚く一重である。縄文人に比べるとマユもヒゲもうすい。また、歯のかみ合わせは、上顎と下顎の歯がはさみのようにすれ違っている。

出典：IPA「教育用画像素材集サイト」http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/

☞古墳時代（紀元後4世紀頃～）

3世紀から7世紀にかけて作られた豪族などの墓を古墳といい、この時代を古墳時代といいます。古墳を作るためには多くの費用や人材などが必要なため、当時の豪族たちが強い権力や優れた技術を持っていたことが分かっています。

500年ころ

- 市内に古墳が多く築かれる（宮脇古墳群など）
- 埴輪をもつ古墳（芳ノ塚古墳）
- 振ると音が鳴る鈴器台付はそうをもつ古墳（奈良山古墳群）
- 須恵器が焼かれはじめる（末古窯跡群）

弥生時代 → **古墳時代** → 飛鳥時代

須恵器

青く硬く焼きしまった土器で、古墳時代中頃に朝鮮半島から伝わった技術で焼かれた土器です。窯が使われるようになったことで、縄文・弥生土器よりも硬く焼くことが可能になりました。須恵器はまたたく間に全国に広がり焼かれるようになりました。その後１５世紀に至るまで須恵器の伝統は続きました。

奈良山古墳群第７号墳

はそう（須恵器）

奈良山古墳群第７号墳

胴の部分に小さな穴をあけたもので、穴に管をさして液体（水や酒）を吸ったり注いだりしたものと考えられています。
また、写真の鈴器台付はそうには土でできた玉が入っており、振ると音がなります。

提瓶（須恵器）

奈良山古墳群第７号墳

つぼ型の土器を押しつぶしたような形で、取っ手がついており、現在の水筒のような携帯用の容器であったと考えられています。

直刀・刀子

直刀は、刀身がまっすぐで反りのない刀です。日本では平安時代中期頃まで用いられました。
刀子は、奈良～平安時代初期の刀剣の一種で、後の小刀にあたります。

奈良山古墳群第７号墳

埴輪

芳ノ塚遺跡

埴輪とは土を素焼きして作られたもので、古墳のまわりに並べられていたものです。埴輪には、動物埴輪や家形埴輪など様々な形がありますが、なかでも写真のような筒状の円筒埴輪がもっともよく作られました。

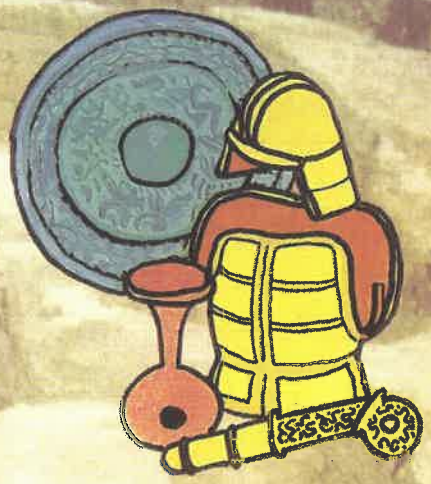
古墳時代を見てみよう！

―クニから国家へ―

あの巨大なものがお墓？

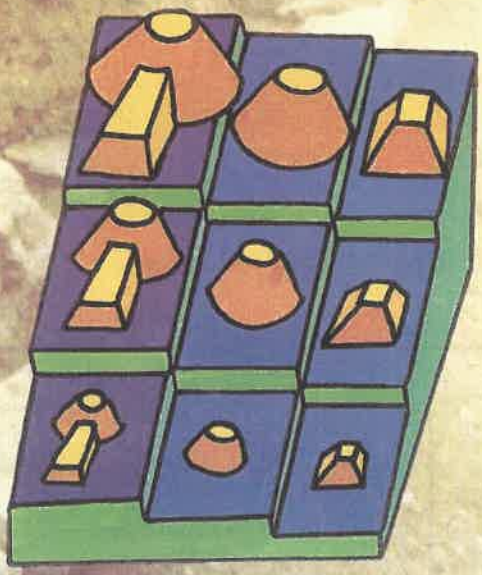
中に何が入っているの？

ただの墓ではないぞ。
わしらは古墳の形や大きさで
権力を表したんじゃ。



始めのころは権力を表す
鏡などを入れたのよ。
この頃は死後の世界で
生活できるように
土器などが多いわね。

わしのために前方後円墳を
今、作っているのだ。



和出比延氏の古墳の階層差のイメージ図

上野ヶ原古墳（大原）の横穴式石室

イラスト：UEDA TAMAE

古代のアクセサリー

まが玉は、古代アクセサリーのひとつで、曲玉とも呼ばれる。縄文時代の玦状耳飾りが原型と考えられ、日本の縄文時代の遺跡から発見されるものが最も古いといわれている。
古墳時代は権威の象徴と考えられ、豪族たちがかざるのに大きさ、数、形を競ったようだ。

東家地古墳の出土首飾り

福島古墳の耳環

☞奈良時代(710～794年)

710年に都が平城京へ移り、奈良時代がはじまりました。仏教が国家からあつく保護され、日本中でお寺が造られました。

690年すぎ
三田ではじめてのお寺がつくられる
（屋敷町遺跡）

700年代
大規模な建物群がつくられる
（芳ノ塚遺跡など）

末の周辺で多くの須恵器がつくられる
（末古窯跡群）

古墳時代 ＞ 飛鳥時代 ＞ 奈良時代

軒瓦（のきがわら）

瓦は建物を雨からまもるもので、多くの場合軒先には文様を施（ほどこ）した「軒瓦」を用います。

現在はいろんな建物の屋根に瓦が使われていますが、瓦葺（かわらぶ）きの建物は、５８８年に現在の韓国から招かれた瓦博士をはじめとする寺院建築の専門家によって造られた飛鳥寺（奈良県）がはじめてで、瓦はお寺の一部として日本に伝わりました。

また、奈良時代に、お寺以外の建物にも瓦が使われるようになりましたが、お寺、駅、役所などでしか、瓦は使われませんでした。金心寺跡廃寺（こんしんじあとはいじ）からは、多くの瓦が出土しているので、三田にも瓦葺きの建物が建っていたことがわかります。

金心寺跡廃寺

硯（すずり）

円面硯（えんめんけん）

南が丘・打上がり遺跡

転用硯（てんようけん）

屋敷町遺跡

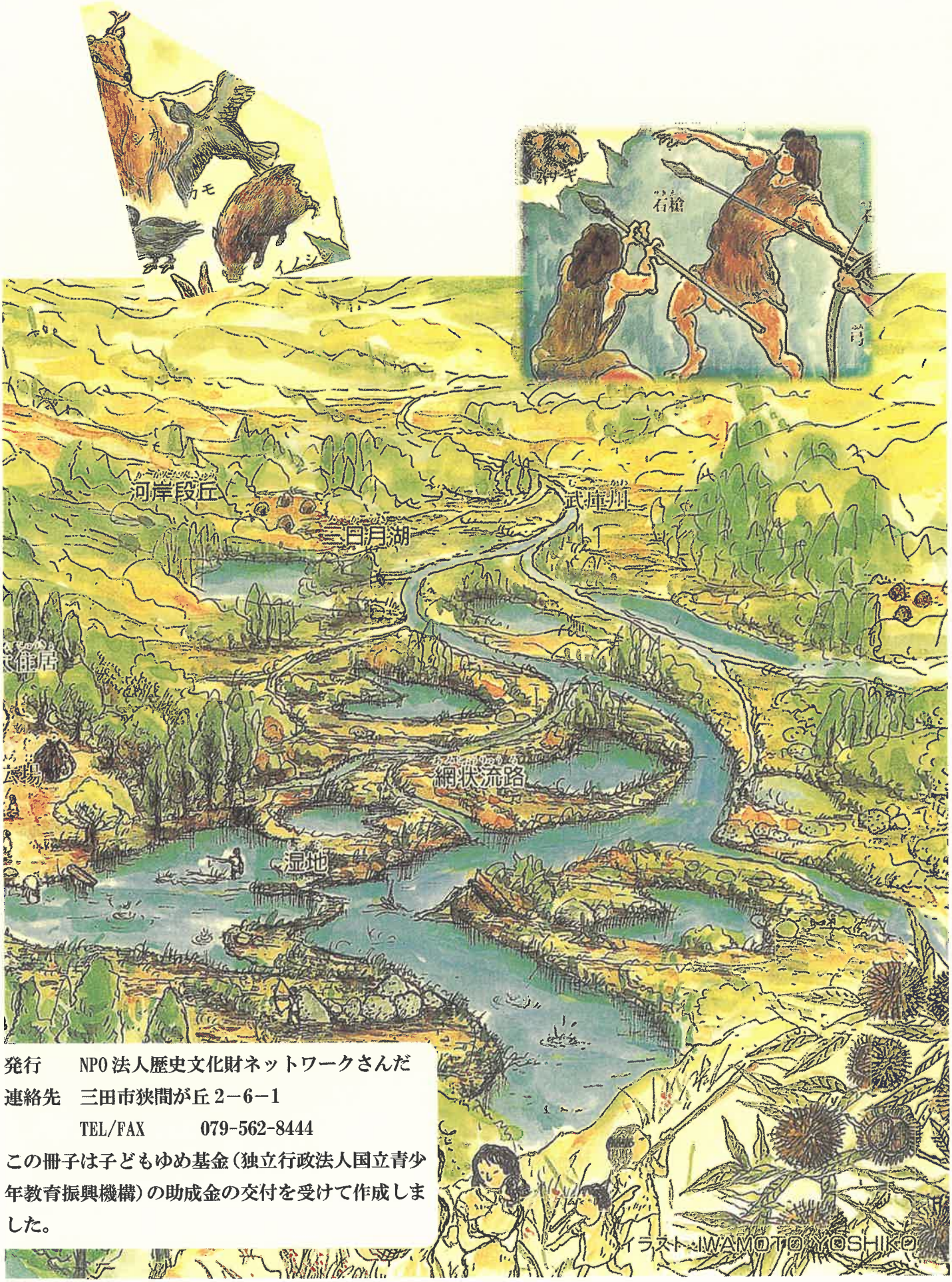
奈良時代には文字の使用が急速に進み、硯（すずり）と墨（すみ）は必要不可欠な道具となりました。主に役所や寺で使用されたようです。

円面硯は古代の硯の一種です。上の平らな面が硯の面になっています。また、壊れてしまった須恵器の皿やふたを硯として再利用したものもあります。それを転用硯といいます。

瓦塔（がとう）

金心寺跡廃寺

須恵器の塔。木造の塔の形を模して各層ごとに焼いてから組み立てたものです。建物の塔にかわって屋外または堂内に安置されたといわれています。



発行　NPO法人歴史文化財ネットワークさんだ
連絡先　三田市狭間が丘2－6－1
TEL/FAX　079-562-8444
この冊子は子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の助成金の交付を受けて作成しました。